

## 愛臨技学術部研究班活動報告書

所属：一般検査研究班 提出日：2019年6月17日 報告者：鈴木 康太

行事種別	研究会	行事番号	190000774	
開催日	2019年6月8日(土)			
時間	開始	15時00分	終了	17時00分
場所	だいでうクリニック5階講義室			
テーマ	新しい一般検査領域における自動化・精度管理・業務の効率化の試み			
生涯教育履修点数	専門教科 20点			
司会	愛知医科大学病院 山口 京子 特定医療法人衆済会 増子記念病院 平田 弘美			
講師	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 永久寄生虫卵標本作製の試み <span style="float: right;">岡崎市保健所 佐藤 千歳</span></li> <li>2. 全自動尿中有形成分分析装置 UF-5000 の検討 <span style="float: right;">JCHO 中京病院 矢井 友紀</span></li> <li>3. 潜血陽性と異形細胞の出現頻度から算出した尿沈渣目視条件の検証 <span style="float: right;">藤田医科大学病院 林 和佳奈</span></li> <li>4. 赤血球封入標本を用いた目合わせの試み <span style="float: right;">藤田医科大学病院 櫻井 昌代</span></li> <li>5. 当院における尿沈渣内部精度管理の取り組み JA 愛知厚生連 江南厚生病院 杉浦 里佳</li> <li>6. 『検査データ管理システムのトータル提案により、一般検査の効率化を実現する方法』 <span style="float: right;">アークレイマーケティング株式会社 学術推進チーム 多田 昌代</span></li> </ol>			
内容	<p>昨年度、愛知県の会員で学会発表された演題を再度発表して頂いた。更にアークレイマーケティング社の多田様より検査データ管理システムのトータル提案についてご講演頂いた。演題は5題、</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 永久寄生虫卵標本作製の試み～岡崎市保健所 佐藤千歳技師 永久寄生虫卵標本については近年依頼数、検出率の減少した寄生虫卵について新人教育の上で必要不可欠となってくる。検討された寄生虫は一部であったが今後更に他の寄生虫卵でも検討されるということであった。</li> <li>2. 全自動尿中有形成分分析装置 UF5000 の検討～JCHO 中京病院 矢井友紀技師 UF5000 の検討については尿中有形成分分析装置 UF1000i の後継機として発売された機器であり、UF1000i より目視の再検率は減少したということであった。現在各施設で一般検査を少人数でやっていけないといけないうちで有効な機器であると思われた。</li> <li>3. 潜血陽性と異形細胞の出現頻度から算出した尿沈渣目視条件の検証～藤田医科大学病院 林和佳奈技師 尿沈渣の目視条件の検証については、再検基準に入っていなかった項目を入れたこ</li> </ol>			

	<p>とで目視率が上がったが異形細胞を見落とさないために必要な条件であったということであった。</p> <p>4. 赤血球封入標本を用いた目合わせの試み～藤田医科大学病院 櫻井昌代技師 赤血球封入標本での目合わせの試みについては、固定標本を作製し、一般検査室の要員で尿沈渣業務に携わる技師を対象として赤血球形態と数の判別を行い評価した。同一標本での繰り返し指導が可能であり、個人間差の是正に有用であったという報告であった。どのような検体を使用したかという質問が会場からあった。質問に対し演者から他の成分を含まない赤血球のみの検体をしたという回答があった。</p> <p>5. 当院における尿沈渣内部精度管理の取り組み～JA 愛知厚生連 江南厚生病院 杉浦里佳技師 尿沈渣内部精度管理の試みについては、月に一度顕微鏡的精度管理に組み込み、その管理はデータベースソフトウェアを利用し、一般検査部門における精度管理システムを構築した。内部精度管理実施後は回答者で結果検討会を行いその結果をデータベースにて保管管理することにより、細胞形態の復習や症例の見直し等が可能となったという報告であった。尿沈渣の内部精度管理は不可欠であるが、同じ標本を担当技師全員で行うことは非常に難しい。それを可能にしたこのシステムは有効であったということであった。</p> <p>6. 検査データ管理システムのトータル提案により、一般検査の効率化を実現する方法について、アークレイマーケティング株式会社 多田様より近日発売される尿中有形成分分析装置も含めた機器説明など講演された。一般検査の流れに沿って業務の提案をしていただき、システムをうまく使用することにより検査の効率化が可能であるということであった。会場から尿沈渣の目視再検率はどれくらいが理想で有効かという質問があった。これに対し機器を使用しながら目視再検率を出す必要があり一概には言えないという回答であった。</p>
参加者	総数：74名（会員 68名、県外会員 1名、非会員 0名、賛助会員 5名、学生 0名、その他 0名）
共催、後援など	